

文章で人をだまさないためには、そこで述べているのが、実際に体験したり目撃したり調査したりしたことなのか、それとも、なにかをもとにして自分が推察したこと、日ごろ考えていること、想像してみたことなのかを明確にしなければならないだろう。つまり、事実なのか、推測や意見なのかを区別する必要があるということである。事実であれば「である」「だった」と結んでもいい。が、推論なら推論らしく「だろう」とか「と思われる」とか「らしい」とか明記する。こういうことをめんどろがって読者が A ような文章は、結果として嘘をついたことになる。たったそれだけで悪文の資格を獲得する。

たとえば、子どもが赤い目をして立っているとする。そういう書き方にとどめれば、むろん事実の文だ。「目が充血している」ととらえて、そう書いても、このへんまでは、まず、事実を書いているとして問題はない。しかし、そこから、さっきまで泣いていたという判断をひきだすところまで進めば、もう客観的な事実だけを述べた文とはいえない。

客観事実を伝える文のほうが価値が高いとか、推論や意見を述べるのがいけないとかいうつもりは①毛頭ない。ただ、悪文であることをまぬがれるためには、「さっきまで泣いていたのだ」と書くのと、「a 泣いていたにちがいない」と書くのと、「b 泣いていたのだろう」と書くのと、「c 泣いていたのかもしれない」と書くのとでは、②事実の認識のしかたに差があるということを自覚し、正確に伝える配慮が必要だといいたいだけだ。その子は単に寝不足だったのかもしれないのである。

新聞記事ともなれば、文章の具体性や平明さも大事だが、何よりも必要なのは B だ。辰濃和男『文章の書き方』では、正確に伝えるために、こまめに調べることと、先入観にとらわれずに自分の目でしっかり見ることを勧めている。具体的には、数字と固有名詞には特に気をつけ、おっくうがらずに辞典や年表その他の資料にあたる必要だという。そうすることで不注意な誤りが大幅に減り、*孫引きによる失敗もある程度防げるといふ。また、夕焼けというとき、すぐ「あかね色」と書きやすいが、実際には朱色に燃えるときも、淡い紅色に染まるときも、えんじ色に見えるときもある。この教訓は新聞記事の場合だけではなく、文章の書き方一般にあてはまる。

事実か意見かという点をもう少し細かく見れば、同じく事実を伝える態度で書く文章にもいろいろある。それが自分の直接に体験した事実なのか、人から伝え聞いた事実なのか、または、③だれかの考えを引用したり紹介したりしているのか、といった違いを区別することも大切だ。一方、意見を述べる態度で書く文章でも、それが自分自身の考えなのか、だれかの考えなのかを明確にすることが肝要だ。推定・評価・説・主張といった④判断の差を言語的に明示することが正しい伝達を支えていることを忘れないようにしたい。

このあたりの表現態度がいまいのままに書きつづけると、あとで修正不能になることもある。推敲段階で正確な文章に近づけようとして表現をいじりだすと、つじつまが合わなくなることが多いのだ。たとえば、事実をもとに次を展開させたはずなのに、そこが実は意見だったということがあとでわかると、そこだけ直せばいいというものではなく、それ以降の論が成り立たなくなる。自分の意見のつもりで書いていたところが実は他人の意見のうけうりだったりすると、全体の記述の流れがおかしくなり、オリジナリティーが消滅したりする。直せば直すほど支離滅裂になり、ますます悪文に近づく。

文章はまちがってさえいなければいいというものではない。これで意図が充分通じるか、相手が誤解するおそれはないか、もっとわかりやすく書けないか、というふうに一度、他人の目で批判的に読んでみるのである。

⑤他人は自分ではない。これは恐ろしいことだ。そのことがほんとうにわかったとき、悪文は大幅に減るはずである。

*孫引き≡他の本に引用してある文句を原典にさかのぼらずそのまま引用すること。

(1) A にあてはまる適切なものを次から一つ選びなさい。

- ア 実際に体験していない
- イ 推測と意見とが区別できない
- ウ 事実と意見とを混同する
- エ 事実を推論だと誤認識する

(2) ———線①「毛頭ない」の使い方として適切なものを次から一つ選びなさい。

- ア 引退する気など毛頭ない
- イ 発表する時間など毛頭ない
- ウ 練習する気力など毛頭ない
- エ 合わせる顔など毛頭ない

(3) ———線②「事実の認識のしかたに差がある」とありますが、……線 a→cにいくにつれて、どのような「事実の認識のしかた」の違いがでてきますか。「aからcにいくにつれて」に続けて、適切なものを次から一つ選びなさい。

aからcにいくにつれて

- ア 価値が高くなる
- イ 確信の度合いが弱くなる
- ウ 客観性の度合いが強くなる
- エ 推論や意見を具体化している

(4) B にあてはまる言葉として適切なものを次から一つ選びなさい。

- ア 新鮮さ
- イ 独自性
- ウ 奇抜さ
- エ 正確さ

(5) ———線③「だれかの考えを引用したり紹介したりしている」ことが、はっきりわかるように、筆者はどのような工夫をしていますか。適切なものを次から一つ選びなさい。

- ア 「かもしれない」という表現を使用することにより、推論であることを明確化している
- イ 「」を多用することにより、自分の考えではないことを強調している
- ウ 新聞記事を例に挙げ、正確な記事の伝え方、適切な引用の扱い方を明らかにしている
- エ 文末に「という。」という表現を用いることにより、引用であることを明らかにしている

(6) —線④「判断の差を言語的に明示することが正しい伝達に支えている」と関係の深いものとして適切なものを次から一つ選びなさい。

- ア 人前で意見を述べる場合は、自分の立場を決めて話すべきだ
- イ 人前で意見を述べる場合は、具体例をあげて話すべきだ
- ウ 人前で意見を述べる場合は、最後の言葉まで明確に話すべきだ
- エ 人前で意見を述べる場合は、反対意見も聞きながら話すべきだ

(7) —線⑤「他人は自分ではない」とありますが、筆者はどのようなことをいいたいと考えられますか。適切なものを次から一つ選びなさい。

- ア 他人の批判的な目は自分の見方とは異なるので、文章は他人に批判してもらおう方が良いということ
- イ 他人の意見と自分の意見との違いを明確にし、他人の判断を引き出す文章を書くべきだということ
- ウ 他人は自分とは考え方や感じ方が違うので、自分の文章が意図通りに伝わるとは限らないこと
- エ 他人と自分との表現態度の違いに着目し、他人の目で批判的に読むことにより悪文を減らすべきだということ

(8) 本文に述べられている「悪文」のほかにも、文の組み立てからみて悪文といえるものがあります。次の文が正しい表現になるように、——線「なりたい」を書き直しなさい。

私の将来の夢は、人間の幸福のために活躍する宇宙飛行士になりたい。

【11】

私が十九の時、遊泳中に起こったことだ。私は十五のころに水泳を始めたが、次第に熱心になっていって、十九の夏には毎日のように海に出かけていった。ある雨の日、もう少し沖へ出てみようという気になった。私は浮きを手放して沖へ泳ぎ始めた。浮きまでが第一段落だったとすると、第二段落へ入っていったことになるうか。ところが、沖へ泳ぎ始めると止まらなくなってしまった。行く手には無論波ばかりあるのだが、①それに挑んでいく気持ちが次から次へとわいて、私を引き返させなかったわけだ。どのくらい泳いだか距離の記憶がないが、私としては、第二段階を越えて、第三段階、さらに第四段階ぐらいいった気がする。疲れはしなかったが、それでもあまり無謀なことはいけなさと踏みとどまって、岸へもどった。そして、自分が無事だったことにホッとした。

これは私だけにあったことではなく、だれも似た経験はしているだろう。限界を破るとか自信をつけるなどという言葉は、こういう経験を指すのであろう。そして私は、自分がちょうど二十歳ぐらいいったこともあって、あの経験を成人の儀式になぞらえて考えてしまう。いわば、自分も泳ぎに関して②一人まえになったという自覚を得たというふうに考えるわけだ。

こんなことを書くと、大したことではないじゃないか、という人があるだろう。しかし、こうした経験は、次のようなことを想像する場合には役に立つ。私の住んでいる所の近くには、大井川の河口があり、そこには毎年二回渡り鳥のシギがやってくる。この鳥はシベリアとオーストラリアの間を渡っているのだそうで、*大井川河口は宿場の一つになっているわけだ。この鳥はシベリアで巣立つという。してみれば、最初にシベリアを出発して、オーストラリアをめざす鳥の気持ちは、どんなだろう、と私は考えてしまう。おそらくは、若鳥はどこへ行く

とも知らず、群れに交じって大空へ飛びたつのだろう。そして、いったんそうなれば、果てしなく飛び続けなければならぬ。苦しいし楽しいし恐ろしい経験であろう。その間わき続ける勇気を、若鳥たちは身の内にどう実感しているのだろうか。鳥の実感などというとおかしいかもしれないが、人間である私はそのように想像する。これも、不安を抱いて沖へ泳いでいった十九歳の私の実感から出てくる想像で、いわば、あの経験は鳥と私を結びつける役目をしていることになる。つまり、^③鳥の気持ち^③がわかるような気がして、私は鳥を見ているも見あきない。もちろん、考えてみれば、泳ぐ人間と飛ぶ鳥は大いに違っている。第一に、泳ぐということは人間にとって趣味なのだが、飛ぶことは鳥にとつて趣味ではない。鳥は飛ばなければならぬ生き物なのだ。したがって、シベリアからオーストラリアへ初めて渡ろうとする若鳥に、生き物の出発という言葉^④を当てはめると、話はつきりする。この場合、飛ぶことは雄大であるが単純な鳥たちの習性であつて、ほかの生き方は許されていない。つまり、鳥の運命のわけだ。

渡り鳥のシギにははつきりした出発の瞬間がある。しかし、人間にはそれがあるのだろうか。そう問われれば、さしずめ学校を出て自分で金を稼ぎ始める時がそれに当たるだろう、とでも答えざるをえない。しかし、これが答えだとは、どう考えてもさびしい。私は生活の上で経済ということ^④を軽視はしていないけれど、金を稼ぎ始めるのが人生の出発だとするのは、どうも不満足だ。よくいわれる、金は人生の手段であるが目的ではないという言葉^④を、私もまた信じている。

^④この問題は意外に難しい。特に現代では難しい。もちろん私にだって解けないことだが、ここで私は、この問題を解くための手がかりとして、仕事ということに注目したらどうかと思う。昔のことだが、私の家の近所の漁村には、*網元制度というものがあつた。それによれば、*舟方に赤ん坊が生まれると、網元制度の中に組み込まれ、網元はその赤ん坊が育つにつれて、何歳まではいくら、何歳まではいくらと給金を払い続ける。その代わりに、舟方の子どもは、何歳まではどの仕事、何歳まではどの仕事と働かされる仕組みがあつた。やがて、子どもが十六歳になると船に乗る。おそらく、多くの少年たちは晴れがましい気持ちでその日を迎えたのであろう。つまり、おれも一人まえと見なされ、漁師の伝統を継ぐのだという気持ちが胸にあつたのであろう。鳥が群れの習性に従わざるをえないように、漁師もその社会のおきてに従わざるをえなかつたわけだ。漁師だけに限らない、ある鳥がシベリアからオーストラリアへ不可避的に旅立つように、若者たちは一つの仕事に従つていった。

以上書いたような、仕事に対する見方を現代に復活させようなどと思えば、とんでもない時代錯誤になつてしまう。私はただ、そこにあつた^⑤人間性の自然^⑤はやはり尊重されなければならないというのみだ。現代には、大幅な職業選択、変更の自由がある。ここに人間は生活の中心となるような価値観を苦心して作り出さなければならぬ。そして、その価値観は、深く仕事にかかわるものであつて、金銭や名誉にかかわるものではないだろう。そう私は考えている。

(小川国夫「出発の不安」から)

*大井川⇨静岡県中部を流れる川。

*網元⇨船舶や漁網などを所有し、多数の漁師を雇つて漁業を営む者。

*舟方⇨船に乗ることを職業とする者。

(1) ——線①「それに挑んでいく気持ち」とありますが、これに最も近い意味で用いられている言葉を、3段落中から漢字二字で抜き出しなさい。

(2) ——線②「一人まえになつたという自覚」は、何によって得られると筆者は考えていますか。適切なものを次から一つ選びなさい。

ア 限界を破つたり自信をつけたりする経験

- イ 自分が無事であったことに安心する経験
- ウ あまり無謀なことはいけないと踏みとどまる経験
- エ 二十歳の成人の儀式をする経験

(3) —線③「鳥の気持ちが変わるような気がして」とありますが、筆者がそのように思うのはなぜですか。適切なものを次から一つ選びなさい。

- ア 自分自身も不安を抱きつつ長い距離を泳いだ経験があったから
- イ 私が近くに住む川には、渡り鳥がやってきたから
- ウ 趣味とはいえ、私は泳がなくてはならなかったから
- エ 鳥と同じく、十九歳の私は家から巣立つ歳であったから

(4) —線④「この問題」とは、どのような問題ですか。適切なものを次から一つ選びなさい。

- ア 鳥が群れの習性に従うように、人間はその社会の掟に従わざるを得ないという問題
- イ 金は人生の手段ではあるが、目的ではないかという問題
- ウ 人間にははっきりした出発の瞬間があるだろうかという問題
- エ 生活の中心となる価値観は金銭ではなく、仕事に関わるものではないかという問題

(5) —線⑤「人間性の自然」の説明として適切なものを次から一つ選びなさい。

- ア 若者たちが仕事を通して一人まえとなることに喜びを感じる
- イ 人間にとって金は人生の手段であるが目的ではないということ
- ウ 仕事を選んだり変更したりする自由が若者にはあるということ
- エ 網元が舟方の子どもの成長にあわせて税金を払い続けていたこと

(6) この文章に書かれている内容と一致するものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 昔の社会にあったきびしいおきての存在を、時代を超えて、現代に生きる若者たちにも伝えていかねばならない
- イ 学校を卒業し、自分の力で金を稼ぎ始めるようになってはじめて、人間として一人まえになったと考えてよい
- ウ 現代において人間は、生活の中心となり、深く仕事にかかわるような価値観をつくり出していくべきである
- エ 鳥がほかの見知らぬ土地に不可避的に旅立つように、人間にも必ず、生まれ故郷からほかの土地へと旅立つ時機がくる

【三】

次の文章のカタカナ部分を漢字にあらためなさい。

- ① 私は彼に出会って、人生のイギを見出した。
- ② 試合を前に極度にキンチョウしてしまった。

- ③ 今日の打ち合わせは、セイケツ感のある服装で来てくださいね。
- ④ その商品には、根本的なケツカンがある。
- ⑤ 彼は文学をセンモンに研究しているらしい。
- ⑥ 携帯電話がフキユウする。
- ⑦ 日本経済がホウカイするはずがない。
- ⑧ 彼女にムジユンを指摘された。

(5)	(1)
(6)	(2)
(7)	(3)
(8)	(4)